

ホームレス診療を継承して

杉浦医院院長

森 亮太 もり りょうた

1998年に名古屋市立大学医学部卒業。淀川キリスト教病院で初期研修。名古屋市立東市民病院、国立療養所恵那病院（現市立恵那病院）、名古屋共立病院、第1なるみ病院を経て、2011年1月より杉浦医院院長となる。著書に『長寿大国日本と「下流老人」』（幻冬舎メディアコンサルティング）。



母の死をきっかけに医師を志し、消化器外科医に進む。その後、ホームレス支援をライフワークとする杉浦医院を継承する。前院長の故杉浦裕はホームレス・生活困窮者支援や労災被災者支援、外国人の健康診断などの活動を続けてきた。医院継承でこうした活動も引き継ぐことになった。開業してからは、積極的に医学生の実習を引き受け、未来の医師へ自分の思いを引き継ぐよう心掛けている。

医師を志したのは、胃がんによる自分の母の死がきっかけでした。医師になる夢は持っていましたが、「やればできる」という根拠のない自信から、懸命に勉強することなく2回目の浪人が決まりました。

その当時社会人の先輩に誘われて、名古屋駅で行われていたホームレスへの炊き出し医療相談・夜回りに参加するようになりました。2浪目の一年間は、この社会活動に費やし、ほとんど勉強に身が入らず、当然のことながら3回目の浪人が決まってしまうました。この社会活動の中で、ホームレスの「おっちゃん」たちから、ケースワーカーとして関わっていた私に「ぼうず、ありがとうな」という言葉をかけられて、「このままでよいのか、医師になるという夢をちゃんとかなえて、おっちゃんたちに恩返しをしなければ」と意

志を固めて勉強に集中し、4度目の受験で医学部合格することができました。

卒業後は亡き母の胃がんを治すような医師になるべく、消化器外科に入局しました。入局後に当時としてはまだ珍しかったローテーション研修のできる淀川キリスト教病院を選び、緩和ケアをはじめ救急や小児科、脳外科、形成外科など多くのことを学びました。外科以外のことに多くの時間を費やしたことが、外科医として一流になれなかった原因かもしれませんが、そのおかげで、開業しても内科、小児科、在宅での看取りに至るまでオールラウンドで診られるようになったのかもしれない。

研修2年の後、消化器一般外科医となり、たくさんの手術を執刀してきました。しかし10年以上外科医として手術をやっていると、

自分の実力が分かってくるものです。手術から手を引いた方が、後輩にとっても、患者さんにとっても良いであろうと考えていた時に、杉浦医院の前院長からクリニック継承の話をいただきました。

前院長の故杉浦裕氏は、ホームレス・生活困窮者支援や、労災被災者支援、外国人の健康診断をする団体に関わり、いつも社会的弱者を支えていこうという熱い「赤ひげ」ドクターでした。杉浦医院を継承することは、こうした活動も引き継ぐことを意味していました。このような活動をしてきた杉浦裕先生は胃がんの末期と診断された後も、社会活動を続けていたために、たびたびテレビ局や新聞社の取材を受けるほどの人でした。その活動を引き継いで、私自身も取材や新聞記事などで多数取り上げてもらいました。おかげで広告を出さなくても患者さんが訪れてくれます。

開業してからは、愛知県内の医学部学生の実習も積極的に受け入れるようにしてきました。

普段自分が当たり前と思ってやっている診察が、学生目から見て違和感を持つようであれば、一般の患者さんから見ても同じことを感じるかもしれません。そのため、学生とどんどん意見交換し、質問を受け付けて自分自身を振り返るきっかけとしています。訪問診療では、バイタルチェックから始まり胃瘻交換、気管切開チューブの交換など在宅医療でできることを体験してもらい、在宅医療の魅力を知ってもらうよう心掛けています。また、私の社会活動の1つであるホームレス・生活困窮者の診療も体験してもらっています。1年で10～15人の医学生が実習に来ているので、10年で100～150人の医学生がホームレス診療に携わったことになります。

普段の診療から始まり、訪問診療、ホームレスの診療、労災被災者支援など、普段大学では学べないことを実習を通して経験してもらうことで、さまざまな背景を持つ患者さんへの思いやりを学び、次の世代の医師を育てる場となることを望んでいます。



2020年越冬での診療風景：横山晃嗣撮影